

博士学位論文審査要旨

2013年10月20日

論文題目： Bound by the Pentecostal Oath: Chivalric Performance and the Round Table in Malory's *Morte Darthur*
(聖霊降臨祭の誓い： マロリーの『アーサー王の死』における騎士的行為と円卓)

学位申請者： 小宮 真樹子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 圓月 勝博

副査： 文学研究科 教授 秋篠 憲一

副査： 福岡女子大学大学院文学研究科 教授 向井 剛

要 旨：

本論文は、トマス・マロリーの『アーサー王の死』における円卓の役割と、円卓の騎士たちの行動および行動規範について論じている。アーサー王伝説研究における円卓という言葉は、特定の形状的特徴を有する家具を意味するだけではなく、騎士団、騎士たちの集う場、アーサー王伝説を模倣した馬上槍試合をも多義的に指し示す。本論文においては、特に円卓の図像学的特徴の歴史、馬上槍試合と聖霊降臨祭における円卓での騎士道遵守の誓い、円卓の騎士たちの友愛と敵対の共存、円卓を形成する要因としての友情と血縁の齟齬、偽証による円卓の内部崩壊に関して、主として英語とフランス語で書かれた膨大な中世の一次資料に依拠しながら、先行研究を適切に参照しつつ、精緻な分析が一貫して展開されている。

第1章では、本論文全体の序論として、12世紀に書かれたワースの『ブリュ物語』から15世紀のマロリーに至るまでの円卓の図像学的特徴と意味の変遷について論じられる。フランス語と英語で書かれた文学作品を分析しながら、まず、フランスの作品における円卓とイエスの最後の晩餐との結びつきが確認される。その上で、イギリスの作品と聖霊降臨祭との関係を実証することによって、マロリーの『アーサー王の死』の文学史的な位置づけが明らかにされる。第2章では、馬上槍試合と聖霊降臨祭の誓いによって、マロリーの作品に登場する騎士たちがどのように騎士としての理想を体現し、追求していくかが本文の正確な読解をとおして記述される。その結果、マロリーの創作である聖霊降臨祭の誓いの重要性が明快に主張される。第3章では、円卓にある「危険な席」にただ一人座ることができ、聖杯探求の冒険に成功するガラハッドに言及しながら、本来は騎士たちを平等に扱うために作られた円卓において、排他的な「危険な席」が存在することの意義が分析される。円卓が抱える結束と競合の二律背反について明らかにするために、「危険な席」に着目した点は、斬新な視点であり、独創的な見解が提示されている。第4章では、聖霊降臨祭の誓いが行われる前、すなわち、アーサー王がグウィネヴィアと結婚する前に登場するバリント、その誓いの後に登場するガレスを比較しながら、友情と血縁の葛藤について論じる。生まれの卑しいバリンは、特筆すべき武勲にもかかわらず、アーサー王の騎士たちから疎外され、ついには弟バランとお互いに相手の正体を知らずに殺しあう。一方、高貴な生まれのガレスは、兄ガウェインの邪悪さを嫌悪し、ランスロットと血縁を超えた友情で円卓の騎士の一員として堅く結ばれるが、悲運にもランスロットの手によって命を落とす。そのことが兄のガウェインにランスロットへの復讐を誓う契機を与えることになり、円卓騎士団の崩壊の要

因となる。バリンとガレスを比較する独創的な視点は、先行研究には見られない新たな課題を明らかにしており、アーサー王研究の新たな可能性を切り開く試みとして高く評価できる。第5章では、騎士道の華と賞賛されるランスロットの聖霊降臨祭の誓いへの裏切り行為が論述される。王妃への愛を貫くためなら、正義に反した行為も辞さないランスロットの行動規範が聖霊降臨祭の誓いを無効化してしまう。騎士団の矛盾と円卓の内部崩壊の過程が丹念な本文読解をとおして明らかにされる。

マロリーの作品における円卓に論点を絞って、詳細な議論を多面的に展開した本論文は、その包括性において類例がなく、マロリー研究に貴重な貢献を果たすものと高く評価できる。包括的な研究であるので、論点によっては、資料の整理が若干不足して、議論が冗長になる箇所も散見されるが、主として英語とフランス語によって書かれた中世の様々な文献を広く渉猟し、一次資料に依拠した議論を展開できている点には、学位申請者の研究者としての優れた資質と豊かな将来性が十分に示されている。

よって、本論文を博士(英文学)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

学力確認結果の要旨

2013年10月20日

論文題目： Bound by the Pentecostal Oath: Chivalric Performance and the Round
Table in Malory's *Morte Darthur*

(聖霊降臨祭の誓い： マロリーの『アーサー王の死』における騎士的行為と
円卓)

学位申請者： 小宮 真樹子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 圓月 勝博

副査： 文学研究科 教授 秋篠 憲一

副査： 福岡女子大学大学院文学研究科 教授 向井 剛

要 旨：

上記審査委員3名は、2013年10月20日15時から徳照館第1共同利用室において約2時間にわたって、学位申請者に対して口頭試問をおこなった。学位申請者は、提出論文に関わる審査委員からのさまざまな質疑に的確に応答し、本論文の学術的価値を証明し、同時に申請者の学力水準の高さが確認された。また語学（英語とフランス語）においても十分な学力を有することが確認された。なお、学位申請者は、上記の口頭試問に先立って、同日13時から徳照館第1共同利用室にて公開講演会を行い、研究成果を広く社会に発信する能力を有することも確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博士學位論文要旨

論文題目: Bound by the Pentecostal Oath: Chivalric Performance and the Round Table in Malory's *Morte Darthur*

(聖霊降臨祭の誓い: マロリーの『アーサー王の死』における騎士的行為と円卓)

氏名: 小宮 真樹子

要 旨:

本稿はトマス・マロリーの『アーサー王の死』における「円卓」の役割を、三つの定義を通じて考察するものである。中世において「ラウンド・テーブル」は「(1) アーサー王の騎士組織 (2) 彼らの集う場である家具 (3) アーサー王伝説を模倣して行われた見世物」を意味した。本研究では特に円卓の形状と意味の変化、模擬戦と誓約による理想の提示、円卓が騎士たちの間に生み出す友愛と敵対、誓いにより結ばれた義兄弟と実の兄弟の差異、偽証による円卓の崩壊を取り上げる。

第一章では、マロリーに至るまでの円卓のイメージの変化を中世ヨーロッパにおける図版と英仏の文学作品から考察する。アーサー王の「円卓」に関する記述はワースの『ブリュ物語』が初出であるが、その描写は「アーサーは貴族を平等に扱うために円卓を用いた」といったもので、組織を指すのか物理的な道具なのか不明瞭であった。クレティアン・ド・トロアのロマンスは前者の、ラハモン年代記は後者の解釈を選択したが、その両者を纏めたのがロベール・ド・ボロンである。彼の三部作はアーサーの円卓を最後の晩餐で使用された円形のテーブルと関連づけることで、組織であると同時に家具であるとした。また、彼は円卓に「危険な席」を設けた。フランスの写本が示すように、この空席はアーサーのテーブルを円形に描写するのに欠かせぬ場となったのである。

こうして変化していった円卓の概念だが、十三世紀以降のイングランドではむしろ、アーサーの祝宴は聖霊降臨祭と結び付けられた。特にマロリーは最後の晩餐の記述を削り、ペンテコステの誓約のシーンを独自に追加している。では何故、イングランドにおいて円卓は聖霊降臨祭と関連づけられたのか。その理由としてはエドワード一世によって建造されたウィンチェスターの円卓が広く知られるようになり、また円形のテーブルが一般的に用いられるようになったことで最後の晩餐のテーブルとアーサー王の円卓の関連性が希薄になったことが考えられる。結果として、アーサー王の円卓はペンテコステにおける騎士たちの集いを象徴する場となったのである。

第二章では、トーナメントと誓約を通じての騎士たちの自己表現を考察する。ロマンスの登場人物に扮して戦う祝祭「ラウンド・テーブル」は中世ヨーロッパ諸国で広く流行したが、マロリーの『アーサー王の死』においてもトーナメントは騎士にとっての晴れ舞台であった。模擬試合は彼らが武勇を示す絶好の機会であり、円卓の騎士たちが戦争よりもトーナメントを多く体験していたであろうことは本文中の記述からも推測できる。一人、もしくは少人数で遍歴に出かける騎士たちにとって、馬上槍試合は優れた技能を公に示すのに欠かせない場所であった。彼らは観衆の前で期待されている役割を演じ、そうすることで自らのイメージを確立するのである。

聖霊降臨祭ごとに繰り返される誓約も同じように、騎士たちの理想の姿を構築する。何のために戦うのかを公言することで、円卓のメンバーは自らのアイデンティティを確認し、かつ形成するのである。アーサーの騎士たちは毎年、聖霊降臨祭になると円卓に集結し、宮廷を離れている間に成し遂げた業績を告げる。彼らの言葉は騎士としての名声を樹立し、実際の体験は公的な場での発言を通じて名誉になるのである。

第三章では円卓の抱える結束と競争のパラドクスを「危険な席」を通じて考察する。円卓は騎士たちを同朋として結束させるが、彼らの結びつきが諍いを引き起こすこともある。たとえばタークインは兄弟のカラドスをランスロットに殺害されたために円卓の騎士たちを手当たり次第に捕らえていた。

しかし、騎士には戦うべき相手が必要である。彼らは常に勇敢に振る舞う必要があるからである。アーサーによるローマ征服後、外敵と戦う機会が減ると、円卓の騎士たちはトーナメントに参加し自らの強さを証明しようとするが、武勇を示すための模擬戦は時に仲間たちの間に憎しみや争いを生み出す結果に終わる。

円卓における「結束」と「競争」のジレンマは、最も優れた騎士のために設けられた「危険な席」に顕著に顕れている。世界最高の騎士以外が座ると命を落とすという椅子は円卓のメンバーの間の優劣を明らかにするだけではない。この場所を与えられた騎士ガラハッドは一度だけ座った後に聖杯探索へと出立し、二度と戻ってくることはなかった。以後、危険な席は所有者の不在という形で円卓に損失を与えたのである。

第四章では円卓の掲げる同胞愛と血縁の齟齬を、バリンとガレスの例を通じて考察する。貧しい騎士バリンは優れた人物しか抜くことのできない剣を手に入れるが、「その剣で親友を殺し、身の破滅を引き起こすことになる」と予言される。だが、皮肉なことにバリンは他の騎士との友愛を求めながらもアーサーの宮廷で孤立していた。不遇のバリンを支えたのは弟バランであったが、冒険の末に二人は正体を知らぬまま殺しあう。弟バランこそが予言にあったバリンの「親友」（中期英語で“frend”は友人だけでなく血縁者も意味する）であり、そして破滅の原因であった。兄弟は同じ墓に埋葬され、彼らの血縁関係は死した後も両者を捕えたままであったことが示唆される。

卑しい生まれに苦しんだバリンとは対照的に、アーサーの甥ガレスは自らの高貴な血筋を隠したまま宮廷を訪れ、台所の下働きとして身を置く。後に彼は「身を棄てていたのは友となるべき人を見つけるため」と告げるが、彼の変装は本質を見抜けるかどうか、周囲の人々へと課した試練なのである。ガレスは自分の生まれが騎士としての優れた資質を齎すと信じていたが、この考えは彼の兄ガウェインによって否定される。ガウェインが残忍な性質であることに気づくと、ガレスは兄と距離を置き円卓の仲間であるランスロットを一層慕うようになる。

血縁を超えた友愛を結んだかに見えるガレスとランスロットだが、この逸話は主に二つの問題を提起している。まず、素性を隠していたガレスに対するガウェインの親切な振る舞いが、血の繋がりがゆえ当然のものと見なされている点である。ガウェインが弟の正体を知らなかったにも関わらず、すべては彼らの血縁に帰せられ、不当に低い評価を受ける。そしてもう一点は、ガレスは不運にもランスロットの手にかかって命を落とすこととなる。弟を殺されたガウェインは盟友ランスロットに激しい憎悪を抱くようになり、円卓が理想とした騎士の友愛は血族による復讐で引き裂かれるのである。

第五章では円卓の崩壊を、ランスロットの偽証を中心に考察する。アーサーの敵対者の代表としてコーンウォールのマーク王がいるが、彼はフランスの作品において騎士たちの集いの場であったテーブルを破壊した人物である。マロリーにおいてもマークは円卓の敵であり、キャメロットの掲げる理想が虚構に過ぎないことを暴く。とある決闘裁判において、彼は有罪であったにも関わらず相手を倒し無罪放免となる。この顛末は、アーサーの宮廷で行われていた裁判が必ずしも正義に基づくのではなく、偶然に左右されることを如実に示すこととなる。

判決を不服としたランスロットはマークに戦いを挑んだ。円卓を代表する騎士が裁判の結果を武力で覆そうとしたのである。この挿話が示すように、アーサーの王国を崩壊へ導くのは外敵ではなく、宮廷で最も高い名声を得ていたランスロットなのである。息子のガラハッドに世界最高の騎士という立場を奪われた頃からランスロットの嘘は暴かれてゆく。聖杯探求の際、彼はペンテコステの誓約にも関わらず、実は王妃に愛されるために戦い続けていたのだと隠者に告

白する。グウィネヴィアとの関係を断ち切ると神（隠者）に誓ったランスロットだが、宮廷に戻った後も二人は姦通を続け、罪を隠そうとするランスロットの発言は次第に疑わしいものになる。グウィネヴィアが護衛の騎士のいずれかと不義を働いたと勘違いしたメレアガントが彼女を告発した際、同衾した張本人であるランスロットは「王妃はそこにいる負傷した十人の騎士たちの誰とも罪を犯していない」と巧妙に言い抜け、決闘で彼女の無罪を勝ち取る。二人で王妃の部屋にいるところをアグラヴェインらに包囲されても、ランスロットは嘘と暴力で窮地を切り抜ける。

ランスロットの欺瞞は己の手によって騎士に叙任したガレス殺害によって露呈する。彼の誓約や武勇は王妃への罪深い愛が引き起こした偽証と暴力にしか過ぎなかった。それでもなお弁明を続け、自分の振る舞いを正当化するランスロットに対し、アーサーとガウェインは「嘘はもうたくさんだ！」と叫ぶ。言葉に対する信頼性が失われたことにより、聖霊降臨祭の誓約を通じて表明されていたアーサーの理念は理解されなくなり、国民には裏切り者モードレッドに劣る君主だと見做される。そしてアーサー自身も、ガウェインの忠告を守らなかったために、さらにベディヴィアが王の命令に背いたために深手を負う。息子モードレッドとの死闘の後、アーサーは戦場で負傷した騎士たちの悲鳴を耳にする。ペンテコステにおいて誓われた円卓の理想は、怒号と罵声の中で失われたのである。

以上のように、『アーサー王の死』における円卓は組織・集いの場・馬上槍試合として中心的機能を果たしている。中でも特に、マロリーは組織としての円卓に焦点を当て、それが孕む矛盾を巧みに描き出した。円卓は共通の誓いで結びついた騎士たちの集団として認識されており、構成メンバーを失った時に作品から姿を消す。そして組織としての円卓が存在しなくなった時、作者マロリーも筆を置く。こうして、アーサー王の生涯のみならず、彼の円卓に集った勇敢な騎士たちの行伝をも綴ったマロリーの“HOOLE BOOK”は幕を閉じるのである。